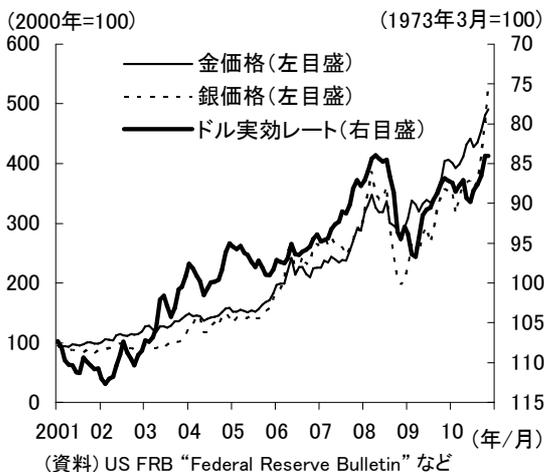


上昇する貴金属価格

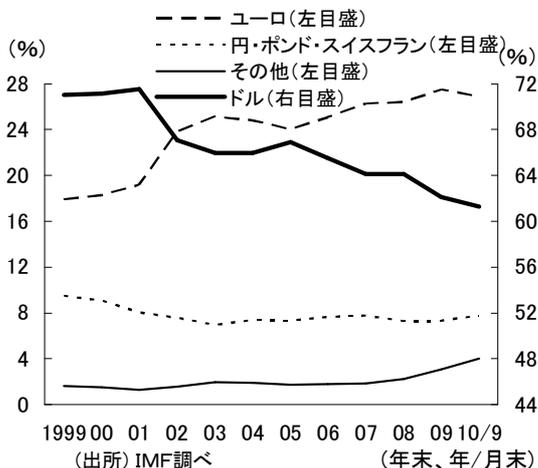
～ 力強い新興国経済とドルの先行き不安が主因 ～

- (1) 貴金属価格が再び上昇傾向。金は1トロイオンス1,400ドル、銀は同30ドルなど、既往最高水準へ（図表1）。原油価格も1バレル90ドル台乗せへ。それらの価格上昇は、まずハイペースの新興国経済の成長が主因。今後を展望しても、中国やインドの年平均9%成長を筆頭に新興国経済の飛躍的成長は少なくとも2010年代半ばまで持続する見通し（図表2）。貴金属や資源に対する旺盛な需要は今後一段と増加へ。
- (2) 加えて、ドル安が作用。これまでの推移をみると、2000年代入り後、貴金属や資源価格はドルが減価すると上昇し、ドルが増価すると下落する逆相関の関係が次第に鮮明に（図表1）。背景には、ドルの先行き不安に根差したリスク回避の動き。
- (3) 端的な事例が外貨準備の動向。IMFによると、各国外貨準備に占める米ドルのシェアが近年、趨勢的に減少し、01年末の71.5%から10年9月末には61.3%へ（図表3）。09年までドルの受け皿はユーロだったものの、10年に入り一転してシェア減少。そうしたなか、近年、その他通貨がシェアを拡大。07年末の1.8%から10年9月末は4.0%に倍増。
- (4) 今後を展望しても、米ドルの先行きに対する不安心理が早急に解消される公算小。既往最大規模に拡大した債務のリバランシング、いわゆる信用収縮がアメリカ経済に下押し圧力として根強く作用するとみられるため（図表4）。以上を踏まえると、少なくとも当面、貴金属や資源エネルギー市場が弱含みに転ずる展開は期待薄。むしろ、一段の上昇によってデフレ色が次第に強まりつつある米欧を含め、コスト・プッシュ・インフレが視野に。

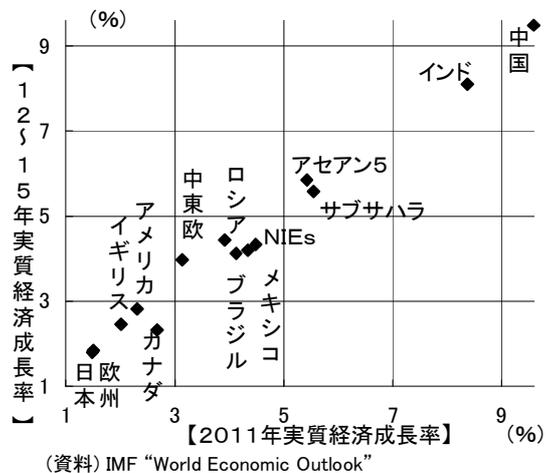
（図表1）金・銀価格とドル実効レート



（図表3）主要通貨別外貨準備シェア(世界計)



（図表2）主要国・地域の成長率(IMF2010年10月)



（図表4）米国総債務残高(GDP比)

